

■ 編集だより

編集後記

編集委員を担当していて一番嬉しいのは、審査した論文が改訂を経て受理され掲載されることだ。実際のところ、投稿論文をそのまま受理するのは例外的であり、構成、記述、考察、倫理的配慮さらには誤字脱字などについてまで、いくつかの再考ないし改訂をお願いすることが多い。審査者の熱意のあまりコメントが増え、投稿者には厳しい要求と感じられることがあるかもしれないが、審査する立場からは受理できる形となって論文が戻ってくることを心から願っていることである。Peer Review とはそういうもので、編集委員が著者あるいは共著者として本誌あるいは他誌への投稿側に回ると、そのときには厳正な審査に納得しつつ改訂作業に励むのである。

とてもありがたいことに、2019年121巻はここ数年に比べると紙面を飾る投稿論文が増えている。この半年間の1号から6号までに、原著としては、『岩山孝幸他：近赤外分光法(NIRS)を用いたうつ病の治療転帰と前頭前野機能との関連についての縦断的検討。』、『國塚拓郎ほか：新潟大学医歯学総合病院における統合失調症患者の臨床機能と認知機能との関連。』、『堀井清香ほか：復職準備性評価スケール(Psychiatric Rework Readiness Scale)によるリワークプログラム参加者の就労継続の予測妥当性—就労継続に影響する要因—。』の3編が掲載されているし、症例報告としては、『畑 真弘ほか：非けいれん性てんかん重積を繰り返し診断に難渋した奇形症候群が疑われた1例。』、『宋 大光ほか：発症から10年が経過した統合失調症の1例に対するシステムズアプローチに基づく精神療法—医師と患者の関係性をみる—。』の2編が掲載されている。資料論文としては、『古郷央一郎ほか：宮崎大学医学部附属病院および宮崎県立宮崎病院における自殺関連行動症例の後方視的検討—「並列モデル」が可能な医療機関での調査—。』、『布施泰子：出産・育児を経験した日本の女性精神科医の、医師として活動するための対処行動とニーズに関する質的研究。』、『平野羊嗣ほか：台湾精神医学の発展と日本のかかわり—台大醫院精神部五十年紀要・日治時代精神病学史より—。』の3編があり、さらに討論として『佐藤晋爾：Jaspersの了解概念の精神療法的活用の可能性。』の掲載がある。

こうしてみると、領域は多様ではあるが、テーマは臨床に密着し、研究室からというよりは診療現場から直接届けられているような報告が多い。独創性や先駆性のある研究成果は国際誌への発表が当たり前となり、特定領域をカバーする国内専門誌が各種刊行されている現在では、精神神経学会の会員全員に届けられる本誌のこのような動向は時代の流れに沿うものでもあるだろう。これからも多くの会員諸氏が臨床現場からの報告を届けてくださることを願っている。もちろん精神科医全般に向けた本格的な研究論文も歓迎である。僭越な言い方になるが、編集委員会はそれらが紙面に登場するための産婆役を務めているつもりである。

そしてこれらの論文が多くの会員や関係者に読まれることを願っている。実のところ毎号の雑誌が果たしてどのくらいの読者を得ているのか、少しばかり気がかりだ。冊子を郵送で受け取ればそれを手に取ってパラパラと眺めることにはなるだろうが、電子ジャーナルのみで冊子を手にしていない会員はメルマガで通知を受けてもそのままスルーすることになっていないか。電子ジャーナルならいつでも読めるし、いつでも目的の論文を検索して引き出すこともできる。毎号に目を通す必要はあえてないかもしれない。しかし雑誌を毎月送り出す側としては、毎号の新着を待っている会員が少なからずいてくれると、これまたちょっと嬉しいのである。

大森哲郎